

合唱名曲シリーズ (Songbook: A Series of Choral Masterpieces) から識る、 日本人作曲家とその作品

金川 明裕

(全日本合唱連盟国際委員)

全日本合唱連盟は 1948 年から毎年、全日本合唱コンクールを開催しています。小学生から大人まで、様々な世代の混声・男声・女声合唱団が全国から参加し、地域大会で選抜された団体が全国大会で演奏する、大規模なイベントです (2019 年参加実績 1,484 団体、詳細は*1 参照)。

全日本合唱コンクールでは課題曲を課しており、JCA は毎年、合唱団の編成・指向性等の多様性に配慮して混声・男声・女声各 4 曲 (計 12 曲) の課題曲を選曲し、「合唱名曲シリーズ」という 1 冊の Songbook として発行しています。エントリーする合唱団は、該当するカテゴリーの 4 曲から任意に 1 曲を選択します。

*1 JCA National Choral Competition

This competition is organized into the following categories; junior high school choir, senior high school choir, youth choir, chamber choir, equaled choir and mixed choir. Those choirs that have won in their prefectural and regional competitions move on to participate in this national competition, which takes place each autumn. The first national competition was held in 1948.

Participated choirs in 2019:

Elementary school 39, Junior high school 607, Senior high school 497, University/Youth 80, Chamber 139,

Community Equal 70, Community Mixed 91

Total 1,484

Remarks: A category for elementary school starts in 2019.

このアンソロジーには、ルネサンス・ポリフォニーから現代に至る海外の合唱作品と、日本の合唱作品 (残念ながら近・現代のものしか存在しません) の両方が、バランス良く収められています。日本の合唱作品では、この国の音楽界を牽引してきた・している作曲家と、次代を担う若手作曲家の曲を、同時に掲載しています (別表参照)。なぜそのようなことが可能だったのか、その秘密は「朝日作曲賞」の存在にありました。

◆別表 1 日本の主な作曲家 (生没年)

／名曲シリーズへの収録作品数

清水 脩 (1911 年～1986 年) /14 作品
高田 三郎 (1913 年～2000 年) /12 作品
間宮 芳生 (1929 年～) /8 作品
三善 晃 (1933 年～2013 年) /15 作品
萩原 英彦 (1933 年～2001 年) /13 作品
池辺 晋一郎 (1943 年～) /11 作品
新実 徳英 (1947 年～) /8 作品
木下 牧子 (1956 年～) /10 作品
千原 英喜 (1957 年～) /3 作品
信長 貴富 (1971 年～) /6 作品
上田 真樹 (1976 年～) /1 作品

◆別表 2 「合唱組曲作品公募 朝日作曲賞」

最近 10 年間の受賞歴

2010 年 土田 豊貴 (1981 年～)
2011 年 森山 至貴 (1982 年～)
2012 年 旭井 翔一 (1988 年～)
2013 年 森田 花央里 (1987 年～)
2014 年 山下 祐加 (1987 年～)
2015 年 市原 俊明 (1982 年～)
2016 年 面川 倫一 (1983 年～)
2017 年 首藤 健太郎 (1985 年～)
2018 年 川浦 義広 (1993 年～)
2019 年 山口 龍彦 (1988 年～)
2020 年 根岸 宏輔 (1998 年～)

JCA では、優れた日本の合唱作品を創造し広めることを目的に、1971年から合唱作品公募を続けています。1979年以降入選曲をコンクールの課題曲として採用することになり、1990年「朝日作曲賞」（賞金100万円）が設置されました。これにより、応募曲は質・量とも目覚ましく向上し、受賞作曲家が一躍社会から評価されるようになったのです。合唱を「森」にたとえるなら、私たちは30年後・50年後を見据え植林をしているのだと思っています。大きく育った森は水を貯え、栄養を作り出し、豊かに生命を育てていくことでしょう。

それでは、ここ最近「名曲シリーズ」に収められた日本の合唱作品から6作品（混声・男声・女声各2作品）をご紹介します。

◎「とむらいのあとは」 信長 貴富

（「初心のうた」から。テキスト：木島 始。混声） (https://youtu.be/1G_n7UFVa-s)

もしこの作曲家が合唱の世界に登場しなかったら、と想像しただけで心寒くなってしまふほど、多作にして有能な書き手です。音楽を専門としない大学の卒業というキャリアにも目が引かれます。ピアノも作曲もほぼ独学であったというから驚きです。

日本は過去 3/4 世紀の間、戦争を経験していませんので、国民の大半が「戦争を知らない子供たち」なのですが、彼はちょうどその半ばに位置するにもかかわらず、そうした理不尽さへのメッセージが多いのも特筆されるべきでしょう。この曲も、「17歳のとき被爆者を介護しながら終戦を迎えた」という原体験を持ちつつ、なお絶望の中に希望の光を見出したいという、詩人木島始の祈りに共振したことが創作の動機であった、と作曲者自身が記しています。

殊に重要なのは「銃よりひとをしびれさす ひきがねひけなくなる歌のこと」という ^{しゅうれん}終聯 であり、儂くも、しかしその存在を信じずにはいられない切なさが色濃く漂っています。いたってシンプルな書法で、特別な和声や仕掛けは施されていません。が、その単純さこそがこの曲の美しさの源泉になっています。強いて言えば、♩=33 という遅過ぎるほどのテンポが、この沈潜した日本語の祈りを、より鮮明に印象づけます。

◆信長 貴富（1971-）（のぶなが・たかとみ）

独学で作曲を学び、公務員から作曲家として独立。第5回（1994年）・第6回（1995年）・第10回（1999年）の計3回、朝日作曲賞を受賞。混声・男声・女声のジャンルを問わず、編曲も含め多くの人に受け入れられる作品を世に送り出し、今、日本国内で最も演奏されている作曲家と言っても過言ではない。

◎「草の上」IV 首藤 健太郎

（テキスト：三好 達治。混声） (<https://youtu.be/PMJIsC9vZkI>)

2017年の朝日作曲賞受賞作です。混声合唱とピアノのための組曲「草の上」の終曲（全5曲）ですが、第1曲はピアノ・ソロによる前奏曲であるため、タイトルはIVになっています。テキストには日本を代表する詩人三好達治（1900-64）の代表作「測量船」（1930）に収められた4篇連作が使われています。

ピアノ・パートは相当以上の技量の持ち主でなければ演奏することができません。日本ではピアノ

教育がかなり進んでいるという事情もありますが、作曲家自身に器楽の様式を声楽に取り込もうとする意図が強いのも事実です。

外国の指揮者から、なぜ日本の合唱曲にア・カペラが少ないのかとしばしば質問されますが、合唱体験のルーツが教会由来の海外に比べ、日本は学校教育由来であることが大きな理由の一つと考えられます。教師は常に鍵盤楽器を使用して指導しますし、歌手もそれを頼りにしている節があり、協奏に違和感を持ちません。

この曲では、ピアノ・パートの右手に調性感が稀薄ですが、左手はというとしっかり完全音程を弾いていて、コーラスは譜面の見かけよりは平易に演奏することができそうです。鶯鳥が小径を、芝生の上を息も切らせずに疾走している。おそらく澄み渡った晴天なのでしょう、彼女の影もまた息切らせず並走していくのです。その慌ただしさと滑稽さを、特にピアノが描写的に表現してみせます。後半のピアノ右手のグリッサンドは鶯鳥が羽を広げたところでしょうか。鳴き声まで聞こえてきそうな臨場感。そして、最後は…。池に飛び込むという、何とも落語的なオチを、水しぶきのクラスター音が描いてみせます。

◆首藤 健太郎 (1985-) (しゅとう・けんたろう)

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了。第 28 回 (2017 年) 朝日作曲賞を受賞。作曲・編曲の他にも、ピアノ演奏や指導、YouTube への映像投稿や音源制作など、幅広く音楽活動を行なっている。

◎「合唱のためのコンポジション第 6 番」I 間宮 芳生

(テキスト：岩手県民謡、一部作曲者の創作。男声) (<https://youtu.be/QTrLj1sPFgo>)

間宮芳生は、海外の合唱団が好んで歌う日本人作曲家の先駆者です。民俗音楽を自らの創作に取り入れたという意味では、ハンガリーのバルトークやコダーイに近い存在かもしれません。実際に 1956 年以降、日本各地の民謡を取材し、詞と曲の関係、言葉とリズムの関係等を分析・分類しようとした試みは、ハンガリーの 2 人に影響されてのことだったでしょう。

その過程で、日本民謡ほぼすべてに挿入される「ハヤシコトバ」の豊富さに気づき、これを種分けし構成する作業から「コンポジション」のタイトルが生まれました。

第 6 番は 3 つの楽章からなり、課題曲になったのはその第 1 楽章です。岩手県 ^{わが}和賀郡と ^{ひえぬき}稗貫郡 (現在は花巻市 ^{おおはさま}大迫町) に伝わる 2 つの民謡を土台に創られています。前半は和賀郡一帯で歌われる「稗搗歌」。稗や粟は米の代用となる雑穀で、寒冷のため飢饉の多かったこの地方では、貴重な食物資源でした。一つの臼を囲み、2 人ないし 3 人が杵で搗く作業の間に歌われる仕事歌です。歌詞の内容は、労働中はおべんちゃらを言い、それが済むと冷たくあしらう雇い主への小作人の悪態、といったところでしょうか。

後半は大迫町 ^{かきたうち}亀ヶ森に伝わる田植踊り「搔田打唄」の中のハヤシコトバをモチーフとし、ホモフォニーの中間部には、間宮独特のフガートも挿入されています。本来単旋律しか持たない日本の音楽が、彼の手にかかるとかくも豊かな音空間へと変容することに、驚きを隠せません。

◆間宮 芳生 (1929-) (まみや・みちお)

東京音楽学校 (現東京藝術大学) 卒業。日本をはじめ、世界の諸民族の民俗音楽を長年にわたり研究。特に日本民謡に見られるハヤシコトバに面白さを見出し、ハヤシコトバを題材とした合唱作品シリーズ「合唱のためのコンポジション」を 17 作にわたって作曲。

◎「まじめな顔つき」 三善 晃

(「クレアの絵本第2集」から。テキスト：谷川 俊太郎。男声) (<https://youtu.be/SJVPsig1hFg>)

三善晃という作曲家が日本の合唱音楽にもたらした影響の大きさは計り知れません。彼の死後(2013)現在に至るまで、合唱文化を支え続けてきたのは三善スクールの功績と言って過言ではないからです。その作風の礎となっているのは、古典的な西欧音楽の伝統であり、つまりは極東に生まれた者が一様に抱く飽くなき憧憬の所産であったろうと思います。

テキストに選ばれた「クレアの絵本」は 1995 年講談社から出版された詩画集で、スイスの画家パウ・クレアの絵 40 点と谷川俊太郎の詩 14 編がコラボレーションしたものです。谷川はクレアの絵画そのものよりも、絵のタイトルに触発されて詩作したと語っています。

「まじめな顔つき」ははっきりとした調性 (G) で書かれており、比較的ソルフェージュが容易であると判断され、課題曲に選ばれました。3 行 4 聯からなるテキスト、お終いの「まじめなひとがまじめにひとをころす おそろしい」が曲の核心になっており、この部分の和声進行は、さすがに三善らしい不気味さを湛え、圧巻です。

音色の変化として柔らかいアクセントを多用するため、< >の表記を日本では「三善アクセント」と呼び、特別視することもあります。クレアの色彩は音楽的であり、三善の音楽は実に色彩的です。

◆三善 晃 (1933-2013) (みよし・あきら)

東京大学文学部仏文科在学中に、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に留学。帰国後、多数の合唱作品をはじめ、管弦楽、室内楽、歌曲など多くの作品を残す。その創作スタイルや和声の使い方などは、特に合唱分野において後進の作曲家に大きな影響を与えている。

◎「春日大社御田植歌」 千原 英喜

(「二つの御田植歌」より。テキスト：古代歌謡による作曲者の創作。女声)

(<https://youtu.be/UJLb4-Fkg9Y>)

現在最も人気のある作曲家の一人と言ってよいでしょう。殊に若年層からの支持の高さは群を抜いています。

日本には「外連(けれん)」という言葉があります。俗受けをねらった演出法を指す演劇用語の一つですが、誇張表現の一種と考えてもらえれば分かり易いかもしれません。フランス語の“déformer”が近いかもしれない。「能」の静に対し、「歌舞伎」や「浄瑠璃」の動がこれに当たります。千原英喜の作品にはこの「外連味」が溢れているのです。

「春日大社」は奈良(日本の古都)春日山の麓に西暦 768 年から建つ、最も由緒正しい御社です。毎年 1 月、その年の豊穰を祈る御田植祭で舞われるこの社の神事がベースになっています。伴奏は中国から渡来した「雅楽」と呼ばれる音楽で、十二律という(ほぼ半音階ですが、平均律とは微妙に異なる)音階によっていて、独特のサウンドです。冒頭のモチーフを鳴らしてみると、多少なりとも実感できるかもしれません。

原曲は「能」の静に近いのですが、千原はあえて仕事歌本来の快活で奔放な、まるで早乙女(田植えをする少女たち)の蹴出しから白い脚がのぞいているような動的表現に書き換えています。

聖と俗、芸術歌曲と歌謡の境界線を取り除くことこそ、作曲家の意図するところなのです。

◆千原 英喜（1957-）（ちはら・ひでき）

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学大学院修士課程修了。作曲を間宮芳生らに師事し、大学在学中より日本国外の作曲コンクールで数多くの賞を受賞。日本の伝統的な音楽や古典文学・民謡・芸能を、キリスト教の聖歌などの西洋音楽と結びつけるという独特な作風を持つ。

◎「^{イエライシャン}夜来香」 池辺 晋一郎

（「花の四季」より。テキスト：江間 章子。女声）

池辺晋一郎は、前述した三善スクールの第一期生とっていい作曲家です。あらゆるジャンルの音楽を手掛けるオールラウンド・コンポーザーですが、演劇や映像の付随音楽では他の追随を許しません。

社会との関わりも重要視していて、環境問題や人権問題をテーマにした作品も数多く発表しています。引き受けている公的役職もたいへん多く、喜寿（77歳）を過ぎて、その旺盛な創造力はとどまるどころを知りません。ちなみにJCAの顧問でもあります。

課題曲になった「夜来香」はピアノ伴奏付の女声合唱曲で、中国南部およびベトナム原産の花の名前がタイトルです。夏に5弁の黄色い花を咲かせ甘い香りを漂わせますが、なぜか夜になると香りがいっそう深くなるのが名の由来になっています。

江間章子の詩と藤島淳三の botanical art からなる「花の四季」という詩画集の秋に設定されており、池辺の作品としては珍しく、「花鳥風月」を愛でる古典的なスタイルに仕上がっています。詩人江間章子は、日本の国民的の歌曲とも言える「夏の思い出」（作曲：中田喜直）の詩人であり、その時は水芭蕉の香りに尾瀬（福島・新潟・群馬の3県にまたがる高地湿原）を思い、今度は遠い異国を夢想しているわけです。池辺は歌詩のないパートのハミングで、深まりゆく秋の空気を表現しようとしたのです。

◆池辺 晋一郎（1943-）（いけば・しんいちろう）

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学大学院修士課程修了。在学中は作曲を三善晃らに師事。合唱・オーケストラ・映画音楽・テレビ番組の音楽など幅広い分野を手掛け、日本の現代音楽を切り拓いてきた第一人者。現在、全日本合唱連盟顧問や東京音楽大学名誉教授をはじめ、多くの文化団体において肩書を持つ。